

<p>8月2日 (日) ヨブ記 37章</p>	<p>「今、光は見えないが、それは雲のかなたで輝いている。やがて風が吹き、雲を払うと、北から黄金の光が刺し、恐るべき輝きが神を包むだろう。全能者を見出すことはわたしたちにはできない」(21-23節)。今、私たちには全能者を見出すことはできないが、恐るべき輝きが神を包む時が必ずくる。普通ありえない、「北」から刺しこむ黄金の光によって。</p>
<p>3日 (月) ヨブ記 38章</p>	<p>「主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった…わたしが大地を据えたとき、お前はどこにいたのか…そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い、神の子らは皆、喜びの声をあげた」(1、4、7節)。夜明けの星たちが喜び歌ったという、天地創造の神のスケールの大きさに圧倒される。私たちの賛美は、どこまで「正しく」神をほめたえることができているだろうか。</p>
<p>4日 (火) ヨブ記 39章</p>	<p>「お前は岩場の山羊が子を産む時を知っているか。雌鹿の産みの苦しみを見守ることができるか」(1節)。創造主なる神のまなざしは、岩場の陰で出産する山羊をはじめ、あらゆる動物たちの産みの苦しみに注がれている。「一羽の雀」さえ神の許しなしに地に落ちることはない(マタイ 10・29)という神の深い慈しみを一人ひとりに届けてくださった主イエスを覚えて。</p>
<p>5日 (水) ヨブ記 40章</p>	<p>「見よ、ベヘモットを。お前を造ったわたしはこの獣をも造った」(15節)、「これこそ神の傑作、造り主をおいて剣をそれに突きつける者はない」(19節)。「ベヘモット」は想像上の巨大な獣と理解されている。現代の科学でも究め尽くせないほど、この地球上は神の「傑作」(ユニークな命)で満ちている。一人ひとりに与えられたユニークさを大切に受け止めて。</p>

<p>6日 (木)</p> <p>ヨブ記 41章</p>	<p>「彼(ベヘモット)がくしゃみをすれば、両眼は曙のまばたきのように、光を放ち始める。口からは火炎が噴き出し、火の粉が飛び散る」(10-11節)。「ベヘモットのくしゃみ」の描写に思わず笑ってしまう。創造主なる神が造られた、さまざまな命のありようは、私たちの「想像力」をはるかに超えて実に面白い。お互いのユニークさを笑顔で受け止め合うことができたら</p>
<p>7日 (金)</p> <p>ヨブ記 42章</p>	<p>「あなたのことを、耳にはおりました。しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます。それゆえ、わたしは塵と灰の上に伏し、自分を退け、悔い改めます」(5-6節)。あれだけ鋭く神に不条理を訴えていたヨブが、長い沈黙を破って語りだした神の前にひれ伏していく。神ご自身がヨブの言葉を確かに聞いて立ち、答えてくださることがヨブの救いとなったのだ。</p>
<p>8日 (土)</p> <p>詩編 1編</p>	<p>「いかに幸いなことか。…主の教えを愛し、その教えを昼も夜も口ずさむ人。その人は流れのほとりに植えられた木。ときが巡り来れば実を結び、葉もしおれることがない」(1-3節)。「幸い」とは何だろう。「世間」で語られる「幸い」とはまったく異なる道を聖書は示す。わたしの心が求める「幸い」はどんな実につながるのか。主の前に心静めて思い巡らしたい。</p>
<p>9日 (日)</p> <p>詩編 2編</p>	<p>「恐れ敬って、主に仕え／おののきつつ、喜び躍れ」(11節)、「いかに幸いなことか。主を避けどころとする人はすべて」(12節)。主に従うことは奴隷のように力で支配されることではなく、主ご自身の偉大さに畏れを持ちながらも、喜びにあふれて生きること。偉大なる主が、わたしたちの避けどころとしておられる恵みをいただいて、新しい週も歩みたい。</p>